

論文

植民地都市をめぐる集合的記憶

——「たうんまっぷ大連」の形成プロセスを事例に——

佐藤 量*

はじめに

本論は、かつて日本国の植民地都市だった中国大連市に住んでいた日本人・中国人双方による記憶地図「たうんまっぷ大連」を取り上げ、集合的記憶の生成プロセスを分析し、植民地体験者たちは大連どのように意味づけているかを考察することを目的とする。

現在、どれほどの日本人が大連という中国の都市を知っていて、どれほどの人が、かつて大連が日本の植民地都市であったことを知っているだろうか。植民地都市大連について考えてきた筆者にとって前提ともいべき問いであるが、多くの人にとっては前提ではないという現状が今の日本にはあると感じている。この現状についてあらためて考えてみる必要があるだろう。これはまさに歴史の記述や記憶の忘却という、歴史学や社会学、人類学で現在議論されている問題である。植民地都市はなぜ多くの人に知られていないできごとなのか。自分自身の認識を改めて整理しながら、植民地都市をめぐる集合的記憶の生成プロセスを追ってゆく。

過去の出来事は時間が経過するにつれ、それぞれの社会集団によって語り継がれてゆく。しかし語り継がれるにつれ特定の部分のなじみが深くなる半面、語られていない別の部分が疎遠でよくわからなくなる。なじみの深くなる部分は、多くの集団で多くの人々に共有され制度化されてゆき、疎遠になる部分は少数の集団にのみ共有され、次第に見えなくなり忘れられてゆく。何かを語っていても同時に語られていない何かがあることは、制度化された歴史ではなく、人々の記憶によって呼び起こされる。それは人々の語りには選択性という意図が介入するからである。では人々はなぜ一部の記憶を共有しようとし、一部の記憶を忘れようとするのか。このことを知るためには、過去の出来事が語り記述される時点において、ある一部分の記憶がどのようなプロセスを経て想像されているかを考察する必要がある。

そこで本論では、日本国の旧植民地都市大連において、かつての大連住民であった日本人と、戦前から現在まで大連に住んでいる中国人双方による「たうんまっぷ大連」という記憶地図作りを分析対象とし、この「たうんまっぷ大連」を集合的記憶の物質的枠組みとする（本論で言及する「集合的記憶」については次節において詳述する）。「たうんまっぷ大連」は、まさに諸集団による記憶が構築される実践の場であった。「たうんまっぷ大連」が構築されてゆく過程を考察することは、植民地都市大連が、現在どのように捉えられているかを知る手がかりになるだろう。

集合的記憶の具体的枠組みとして取り上げる「たうんまっぷ大連」は、1972年から1999年にかけて、旧大連住民であったある日本人と中国人が、多くの旧大連住民の記憶を集めながら、昭和13年～15年当時の大連を地図の中で再現したものである。「たうんまっぷ大連」は、1938年（昭和13年）から1940年（昭和15年）頃の大連を描いた「たうんまっぷ大連」と、1997年から1999年までの現在の大連を描いた「たうんまっぷ大連 現況図」の、2枚組で構成されている。初版が出版されたのが1988年で、その後1999年までに5度版が重ねられた。価格は初版が1,500円、第2版、3版が2,000円、第4版、5版は3,000円であったが、いずれも一般書店などでは販売されず、おもに同窓会などで売られていた。

この試みの特徴は以下の4点にある。①昭和13年～15年の大連が、時間を経て1970年代以降に記されていること、

キーワード：植民地都市、中国大連市、集合的記憶、「たうんまっぷ大連」、多様性

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2006年度入学 公共領域

②地図は旧大連住民の人々の記憶をもとに作成され、地図が完成後も集められた記憶をもとに改定されている、③地図は2枚あり、戦前と現在の対比されている、④ある日本人と中国人が協力して地図作成に携わっていることされていることである。本論では、この「たうんまっぷ大連」を製作された中心人物の日本人Aさんと、中国人のBさんにインタビューを実施して得られた証言を分析対象とする。

集合的記憶について

モーリス・アルバックスの『集合的記憶』は1950年に刊行されたが、いまなお記憶研究の基礎研究と位置付けられる。アルバックスは本書でまず、個人の記憶は集合的記憶と切り離すことはできないという点を最初に強調している。

「個人的な記憶は集合的なものであって、周りの多くの人々から刺激を受けており、接触し続ける。われわれだけが見た事物にかかわるものであっても、ほかの人々によって想いおこされるのである。¹⁾

アルバックスによると、個人の記憶は必ずしも個人が自分の経験から一人で作り上げたものではない。さまざまな他者とその語りによって構成され支えられており、他者とのコミュニケーションを通じて記憶は思い起こされる。個人の記憶が集まったものが集合的記憶であるというよりも、個人の記憶そのものが集合的な過程によって出来上がるのである。

さらに強調して、集合的記憶は社会的集团的に支えられているとのべる。

「すべての集合的記憶は空間においても時間においても有限な集団に支えられている。集団は、第一にそしてとりわけ、自らを意識して生きるものであり、その思考の実質を形成する意識なりイメージを永久化しようと目論む。そのさいに、集団の記憶の中で最も大きい位置を占めるのは、その集団を根底から変容することなく過ぎ去った時間である。²⁾

ある集団のなかで最も大きい位置を占める出来事の記憶は、集団の成員の小さな差異を越えて、固有の性格を持ちはじめ、集団の共通の記憶、すなわち集合的記憶となる。

また、物質や空間のイメージと集合的記憶の形成の関係についてもこのべる。それぞれの集団でイメージされた集合的記憶が、物質や空間と結びつくことで、より永続的に集合的記憶が保持されることになるのである。

「空間のイメージは集合的記憶のうちで重要な役割を演じている。場所は集団の刻印を受けており、また集団も場所の刻印を受けている。それだから集団のあらゆる歩みは空間の用語によって表現することができるし、集団の占有する場所はあらゆる用語の集合にはかならない。この場所の一家の様相、一家の細部はそれ自体、集団の成員にしか理解できない意味を持っている。なぜなら、集団が占める空間の部分はすべて、成員が属する社会の構造や生活の異なった様相に同じだけ対応し、少なくともその社会におけるもっとも安定した部分に対応しているからである。³⁾

「空間のイメージだけが、その安定性のせいで、時を経ても変わることなく、現在の中に過去を再び見出すという幻想をわれわれにあたえてくれる。しかし、まさにそのようなにしてわれわれは、記憶を規定することができるのである。⁴⁾

たとえば記念碑や物語・詩などの、いわば「記憶のかたち⁵⁾」は、集合的記憶の形成に重要な役割をはたす一つの例である。まさに限定された物質・空間に記憶を閉じ込めるための装置である。

集合的記憶は、個人個人の思い出や記憶が堆積してできあがるのではなく、様々な他者や集団、空間、物質との相互関係によって支えられながら構成されており、むしろ集合的記憶によって個人の記憶は規定される。つまり想起される「過去」の出来事は、限定された集団や空間による集合的記憶に依拠するものであり、もはやその「過去」の出来事はオリジナルなものではなく、現在の集団における価値や観念が反映されている「過去」である。

以上のアルバックスの議論を踏まえて、「たうんまっぷ大連」を事例に集合的記憶の形成プロセスを分析する。地図作成に携わった大勢の人々が過去をどのように意味づけ、集合的記憶を形成しているか検討したい。

なお本論で引用する証言は、これまでのフィールド調査によって得られた証言に依拠している。中国大連市では、2004年7月から2007年7月までの3年間で6回の調査を実施した。6回大連調査ではおもにインタビューと資料取

集が目的であった。中国人Bさんには、大連で4回お会いしお話をうかがった。

一方日本国内では福岡市で4回実施した。日本人Aさんへのインタビューで1度訪れている。2004年3月にAさんとお会いし長時間のインタビューを実施した。しかし同じ年の2004年9月Aさんは肺がんで亡くなられてしまう。享年78歳であった。その後、Aさんの残された資料の整理をご遺族から任されて、Aさんの自宅を2005年8月から2006年2月までに3回訪れた。Aさんの蔵書のデータベース化、資料整理を主におこないながら、遺族の方にもお話をうかがった。

Ⅱ章 大連の100年

1 植民地都市大連

大連市は1999年に市制生誕100周年を向かえ、盛大なセレモニーが催された。来賓として招かれた当時の国家主席・江沢民は「大連百年」という題字を書き残し、今も大連市現代博物館で展示されている。この題字にも表れているように、大連の歴史は100年余りであり、他の中国の都市に較べて短く、しかもその半分は植民地統治の歴史であった。それぞれの国家による大連統治は次の国家に受け継がれ、制度や機能は再利用されながら拡大していった。

大連市は、1895年から1905年までロシアの統治をうけ、1905年から1945年までの40年間日本国の統治支配をうけていた。ロシアが植民地統治を開始するまで大連は小さな漁村であり、大連の歴史は列強の植民地統治によってはじまった。ロシアはまず巨大な商業港を築港し、大連の都市計画はパリをモデルとして円形広場を中心に街路が放射線状に伸びる設計であった。

日本国は日露戦争後ロシアの都市建設を受け継ぎ、大連港を増築し、満鉄の経営を開始して、大連を大陸経営の拠点として建設を進めてゆく。日本による大連建設の中心を担ったのは南満洲鉄道株式会社（満鉄）であった。満鉄は大連に本社を設置し、大連は満鉄による満洲経営の中心基地として機能してゆくことになる。大連港は物資や労働力が往来する、日本と大陸をつなぐ大陸の玄関口であった。日本人の大陸移住も、日本からまず大連港を経由して、大連駅から南満洲鉄道を利用して内陸部に向かっていったのである。

1931年に「満洲国」建国以後、日本人の大陸移住は増加し、昭和10年度版『大連市史』によると、1935年（昭和10年）当時の大連在住日本人人口は136,682人で外国人の中で最も多く、じつに大連人口の3分の1が日本人であった。1940年には18万人以上の日本人が大連で生活していた。「満洲国」がおこる30年近く前から大連では日本人が生活しており、中国大陸ではもっとも古い日本の植民地都市である。

2 沿海開放都市大連

1945年以降日本人は大陸から引揚げてゆく。大連港は引揚げの拠点ともなり、内陸部から多くの日本人が大連までやってきて、そこから船で日本に引揚げていった。大連から引揚げた日本人は20万人を超えている⁶。

1949年10月1日に中華人民共和国が成立し、大連は中国の都市となる⁷。その後大躍進、文化大革命を経験した中国は、1972年9月日中共同声明によって日中の国交が回復し、1978年8月には日中平和友好条約が調印された。これにより日本と中国は、政治・経済だけでなく人的交流も活発化してゆく。

1980年代以降、鄧小平主導により改革開放が進められてゆく。大連港を中心に大連市は経済産業都市として急速に発展してゆくが、そのきっかけとなったのが1984年の「沿海開放都市」⁸の指定であった。「沿海開放都市」とは、中国中央政府の政策の一環で、経済技術開発区を建設して沿海部の経済発展を優先的に実施し、積極的に外資系企業を誘致してゆく都市である。大連は中国東北部で唯一指定され、中国東北部をけん引していく役割を期待された。さらに1992年鄧小平による、いわゆる「南巡講話」⁹によって大連の改革開放は一気に進行し、超高層ビルが林立し始め、都市の風景が一変した。

1990年代からIT産業育成に力を入れており、大連市西部の郊外には高技術園区・ソフトウェアパークを建設した¹⁰。2006年には、アメリカのインテル社が2010年上半期を目標にアジアで唯一の半導体工場を建設することが発表され、日本だけでなく世界有数のソフトウェア会社が大連に注目している。

このように新しい大連ではIT産業や造船産業を主要産業としてアジアのみならず世界とつながるグローバル・シ

ティとして成長しているが、その背景ではロシアや日本が建設した港湾、鉄道といったインフラ及び都市機能が現在でも活躍している。

3 戦後の大連と日本人

1972年の日中国交正常化と、1978年の日中平和友好条約締結は両国にとって大きな出来事であった。それは旧大連住民であった日本人たちにとっても大きな出来事であった。なぜなら国交が回復することにより、再び大連を訪れることができるようになったからである。多くの日本人が再び大連を訪れるようになったことで記憶の語りも活発になり、大連を回想する小説やエッセイが多数出版されたが、その多くが「異国のふるさと」を懐かしむ言説であった。

これらの回想本は70年代後半から90年代にかけて頻繁に刊行されるが、そのもっとも早い時期に刊行されたのが、清岡卓行の『アカシアの大連』である。この小説は多くの旧大連住民日本人に影響を与えたが、1970年に芥川賞を受賞したことで、満洲や大連、引揚げ体験を社会的に知らしめる結果となった。

『アカシアの大連』は、清岡の自伝的小説であり、亡き妻との淡い思い出と華やかな頃の大連の街並みを重ねて、今は届かない想いを叙情的に描いた作品である。この小説には「アカシア」「故郷」「ノスタルジー」といったキーワードが多用されている。これらは多くの旧大連住民日本人にとってかつての大連を連想させる用語であり、心に響くものであった。『アカシアの大連』以後、膨大な数の大連・引揚げに関する自伝、小説などが刊行されるが、ここではやはりこれらのキーワードが多用されている。

中国残留日本人らの記憶の語りを研究する蘭信三によると、戦後に日本国内で流布していた植民地や満洲にかんする言説は、満洲は帝国主義的な侵略であり、満洲への入植は「植民地的侵略」であるというものであった。したがって満洲体験者や引揚者の記憶は社会的に抑圧され、社会的に語られることが少なかったという。満洲体験者や引揚者たちの記憶は、ソ連軍侵攻による逃避行にはじまる「被害の語り」であり、他方「満洲はよかった」という「ノスタルジーとしての語り」であったが、体験者以外の人々とは共有しにくい状況であり、同窓会などの共同体でひっそりと語られていた[蘭2007 219]。

このような状況下での『アカシアの大連』の芥川賞受賞は、大連体験者にとって「故郷」「ノスタルジー」というイメージを語り易くした。『アカシアの大連』以後、イメージは繰り返し消費され、「たうんまっぶ大連」が作成されはじめた1970年代後半には、大連をめぐる記憶はすでにイメージ化されつつあったといえる。

このように大連体験者たちは長い沈黙の時期を乗り越えて、1970年代を境に、活発に活動しはじめる。沈黙を保ちながらも水面下で密接に連帯してきた体験者たちは、ひっそりと語り合ってきた「被害の語り」や「ノスタルジーとしての語り」を次々に語りはじめた。しかし一方で「植民地の語り」や「加害の語り」は忘却されていった。「たうんまっぶ大連」が作成されはじめたのは、まさにこの時期であった。

次章では、1978年から1999年まで「たうんまっぶ大連」が製作されていく過程を追う。

Ⅲ章 「たうんまっぶ大連」

1・日本人Aさんと中国人Bさん

本章では「たうんまっぶ大連」が作成される過程をたどりながら、集合的記憶が形成されてゆくプロセスを追う。まず、「たうんまっぶ大連」の主要製作者である日本人Aさんと中国人Bさんのプロフィールについてのべる。

2004年3月15日、著者はAさんと福岡・博多市で初めて会った。待ち合わせ場所の福岡駅前の都ホテル内で待つと、程なくAさんがいらっした。紺地のスーツ姿にカバンをひとつ携えて、小柄な体格であるが、しっかりとした足取りで現れたAさんは、当時78歳であった。年齢を感じさせないはっきりとした口調で、理路整然とした語りが印象的な方であった。私がAさんとお会いしたのは、後にも先にもこのとき限りであった。その後は文通と電話での会話を重ねた。

Aさんは1926年(大正15年)、中国東北部の都市・奉天(現・瀋陽)に生まれた。奉天の幼稚園を出た後、1932年に大連へ家族で移住した。家族は大連市中心部からやや西の日本人街に住んでいた。Aさんの父親は警察官に剣道を

教えることを職業としていた。家には中国人の使用人がおり、「正月には馬車で初詣に出かけていた」というAさん家族の生活水準は、全体的に裕福な大連在住日本人としては平均レベルであったそうである。Aさんは8人兄弟の末子で長兄とは15歳離れている。長兄は満鉄社員として鉄道部に勤めており、大連、奉天などの駅で駅員をしていた。長兄は戦前期にすでに所帯を持ち、Aさんは長兄家族のもとによく遊びにいったという。

Aさんは大連に来てから国民小学校、大連二中（大連第二中学校）に入学・卒業する。卒業後は1945年に関東軍に入隊し21歳で関東軍軍人として終戦を迎える。Aさんにとって思春期を過ごした中学時代が一番思い出深いという。終戦後2年が経過した1947年に、母親の故郷であった福岡に引き上げることで初めて日本の地を踏んだ。Aさんは大連で15年間生活した。

帰国後いくつかの職を経験し、最終的に新聞社に就職する。以後1978年に定年退職するまで勤務し、退職後に大連を約20年ぶりに訪ねたことを機会に「たうんまっぶ大連」を作りはじめた。1999年まで「たうんまっぶ大連」を作り続け、それ以降も一人でさらに細かな地図を作成していたが、2004年9月肺ガンで亡くなられた。享年78歳であった。

生前、著者に対して「大連はふるさとですから。国は違うけどね、いつまでも私にはふるさとですよ」と、懐かしそうに目を細めながら繰り返していたAさんの姿が、今はとても懐かしい。Aさんは大連を「異国のふるさと」と呼んだ。Aさんにとって大連は、地理的距離だけでなく、政治状況によって“禁じられたふるさと”であった。

※

中国人Bさんは静かな語り口調が丁寧な方で、私と話すとき常に日本語で話される。訛りのないきれいな標準語である。Bさんは植民地時代の高い水準の日本語教育をうけているだけでなく、ご自身が戦後大連で日本語教育をする立場であった。

中国人Bさんは1930年（昭和5年）、韓国ソウル（当時日本領・京城）に生まれた。Aさんよりも4歳若い。Bさんの生まれた1930年とは満洲事変の前年であり、日本が武力による大陸進出を本格化させた時期であった。そして1932年に「満洲国」が建国される。Bさんが生まれたのはそういう時期であった。

Bさんは3人兄妹の長男で妹が2人おり、ご両親は朝鮮人であった。Bさんが7歳のとき、1937年に家族みんなで大連に移住してきた。Bさんの家は日本人街にあり、創氏改名は小学校に上がる前からなされていて、学校の名簿の名前は日本名で記されていた。つまり大連にやってきたとき、Bさんは日本人であった。移住後Bさんは日本人として国民小学校、大連二中に通う。大連二中はAさんと同じ中学校である。けれども年齢が離れているため中学時代に直接出会うことはなかった。

Bさんは小学校に入る前、1年かけて日本語を勉強し、小学校に入学する。そして中学在学中に終戦を迎える。終戦時はまだ日本人であったBさんは当時の複雑な心境を次のように語っている。「日本の敗戦と同時に、我が家の者も“国籍を奪われた”無国籍の浪人になり、満洲の荒野に放り出された。ソ連兵の進入を防ぐために玄関のドアに貼った韓国の旗印のみが韓国人であることを表明していた。（中略）そして日本人の引き揚げ。お世話になった方々や同窓生が大連からいなくなると、まったく置いてきぼりにされたような心境だった。親友たちが残してくれた連絡先の住所だけが心頼みとなった」という。

戦後ほどなく中国籍を取得し、中国人として大学に進学、国営企業に就職する。その後大躍進、人民公社、文化大革命といった政治運動の波にもまれ、数々の体験を強いられた。70年代後半ころから、日本と中国の事情をよく知る方として通訳の仕事に携わるうちに、日本語学部教授として大連市内の大学に迎えられ、1990年まで在職する。退官後も民間人として日中友好の架け橋としてご活躍されており、大連日中友好学友会理事も勤められている。Aさんと出会ったのはこの頃であった。同じ大連二中の同窓生の紹介によって、AさんとBさんは戦後50年経過した後、初めて知り合うことになる。同じ中学の同窓生として、気の合う仲間として、2人の親交は深まり、Aさんと共に地図を作成することになる。大連在住のBさんは特に「たうんまっぶ大連 現況図」の制作を担当した。

Bさんの半生はまるで、中国大陸、朝鮮半島、日本列島をめぐる近代以降東アジアの歴史の縮図のようだ。Bさんの静かな語り口調も、こうした複雑な半生に裏打ちされているように感じられる。ご自身も大連での生活を振り返って「大連での65年の生活は、紆余曲折だったが、そのおかげで時勢を冷静に見、物事を客観視する余裕が持てるようになった」とおっしゃっている。数多くのさまざまな体験をされた方である。

2・Aさんの兄

「たうまっぷ大連」づくりは、まずAさん個人による地図作りから始まった。きっかけは1978年に、Aさんが約20年ぶりに“ふるさと大連”を訪れたことにさかのぼる。1978年10月に日中平和条約が締結され、これにより日本人が再び中国を訪ねることができるようになった。

「昔のまま残ってるんですよ。まったく自分が住んでいたところがね。学校もそのままだった。まるでタイムスリップしたみたいだったね。」

大連が昔の姿をとどめていたことが、Aさんを再び大連にひきつけた。20年ぶりに再訪した大連で、Aさんがまず向かった先は戦前の自宅と、青春期を過ごした大連二中であった。それらがそのまま残っていたことが何よりうれしかった。1945年の終戦以降、鄧小平によって改革開放政策が始められる80年代までの中国は、国共内戦や文化大革命によって国内経済が停滞していたため都市を作りかえることができず、植民地時代の建物をそのまま利用していた。したがってAさんは引揚げる前の大連の風景をそこに見えていたのである。

その5年後の1983年、Aさんは定年を迎え、19歳離れたAさんの長兄が喜寿を迎えたこともあり、2人は博多港から船に乗り大連に旅立った。Aさんの長兄は旧満鉄の社員で、主に鉄道業務や貨物の仕事をしてきた。Aさん以上に長く大連に住んでいたこともあり、2人で大連を再び訪れることが長年の夢であった。

3日間の航海の後、大連港に到着した2人の兄弟が見たものは、見違えるほど整備され綺麗になっていた大連の姿であった。すでに友好広場（旧西広場）には14階建ての高層建築が完成間近で、大連埠頭には新しい待合所ができており、日本人住宅地であった南山山麓には高層マンションが林立しているなど、5年のあいだに大連は激変していた。それでも以前のままの場所もまだ多く、そのなかでも兄弟が感激したのが、大連一の繁華街である天津街（旧浪速町）と中山広場（旧大広場）であった。特にAさんの長兄は所帯を持つ社会人だったので、繁華街・旧浪速町の思い出はひとしおであったという。

帰国後も2人は思い出を語りながら、昔の町並みを地図に書いていくことをはじめた。こうして旧大連地図作りは、急速に都市再開発が進行しはじめた大連の中の、消えてゆく過去、いまだ残っている過去の思い出を綴る個人的営みとしてはじまった。

地図作りは大連の中心部に位置する繁華街を書くところから始められる。1983年のことである。思い出の場所を記すことがこの地図を記す目的であった。したがって地図の情報は記憶がたよりである。個人的に楽しむための記憶地図として、自分たちにゆかりのある場所を選んで記述していった。

3・同窓会

次第に兄弟の地図づくりは友人たちの注目を集めるようになってゆく。Aさんの長兄が商業学校の卒業生であることから、同窓生に繁華街の商店の子弟が多く、この人たちから更なる情報が集まりはじめる。したがって集められた情報は都心部の繁華街に集中しており、次第に繁華街の詳細地図ができあがってゆく。

大連出身の同窓会は活動が非常にさかんで、小学校、中学校、高校、各会社などさまざまな集団で定期的に会が催されている。特に国交が回復してからは、同窓会内で大連ツアーを組んで再訪する人々が増えてゆく。Aさんもその一人で、大連二中の同窓会「となかい」「晨光」をはじめとして、昭和製鋼所¹⁾技術員養成所第6期生会「技養会」、大連常盤小学校「常盤会」、大連引揚者最大の同窓会「大連会」など複数の同窓会に参加し、活発に活動していた。（図2）

この情報源のなかで特に貴重だったのが女学校の同窓会であった。Aさんの遺品の中に、『大連中心部 復元図作成の経過』と書かれたファイルがあ



図2 同窓会で書き込まれた記憶

った。ここには、女学校の同窓会から寄せられたさまざまな記憶が保存されている。Aさんの奥さんの話によると、筆跡からこのファイルを整理していたのはAさんの長兄であるという。ファイルされているのは、Aさん兄弟がつくった地図を同窓会で配ったものが、無数の書き込みを経て戻ってきたものである。ファイルを開けると、「主な協力者」として20名ほどの女性の名前がしるされており、名前の下には卒業女学校の名前がある。「弥生」「羽衣」が多い。「弥生」とは「弥生高女」で、「羽衣」とは「羽衣高女」である。女学校の同窓会から寄せられる記憶・証言はかなり熱のこもったものであった。彼女たちにとって40年ぶりに大連の町並みを思い出す作業は非常に楽しいものであった。ファイルに保存されているのは地図だけでなく、一緒に添えられた手紙もある。

そこには、「大連の町並みをあれこれ思い起こし、しばらく郷愁にふけりました。」といった感想がしるされている。当時のことを振り返ってAさんは次のように話してくれた。

「旧大連地図を拡張するには「記憶」が頼りだったので女学校の同窓会は非常に助けになりました。彼女たちは良く覚えているんですね。あそこのアンミツがおいしかったとか、あそこの店によく手芸の材料を買いにいったとかね。」

女学校の同窓会が地図作りには欠かせない情報源であった。こうして多くの情報が一気に入ってくるようになったのだが同時に、「情報がどんどん集まってきたのだけど、やはり「記憶」であり、情報が錯綜して整理するのが大変になった」という弊害も出始めた。次第に中心部の繁華街が地図に再現されてゆき、その都度コピーして友人たちに配り、喜び合っていたという。こうした作業は2年ほど続き、じょじょに地図は拡大され1985年にはずいぶんと大きくなった。Aさん兄弟の地図作りは、同窓会の記憶をとりこみながら、大連中心部を詳細に描くことでいったん完成する。

同窓会の記憶が記入されてゆくことで、地図は構築されていった。けれども、Aさん兄弟にしても、記憶情報をよせた人々にしても、すべての出来事を知らない場合が多いし、すべての人が地図に書き込まれた場所を体験しているわけではない。それぞれの記憶が持ち寄られることで、大連の輪郭が構築され地図ができあがってゆくのである。たとえば、Aさんはアンミツ屋や手芸屋にいったことはなかった。けれどもさまざまな人々の生活の記憶が、大連の記憶としてひとくりにされ、Aさんの個人的記憶にない出来事も、地図のなかで大連の記憶として体験されている。集合的記憶が個人的記憶を規定している例である。同窓会に参加するメンバーは、個人的には体験していないことがらも、会に参加することで疑似体験をすることができ、やがて個人的体験へと変化してゆく。同窓会の記憶を吸収したこの地図作りは、日本人の側から見た、植民地都市大連の疑似体験の場であった。

4・3 通の手紙

兄弟の個人的営みがだんだん他人の興味もそそるようになり、同窓会との結びつきから集合的記憶が構築されるようになる。ほどなくして、Aさんの母校・大連二中の先輩であるCさん（故人）という人物が興味を示し、「自分もこういうものが作りたかった」と一緒に地図をつくることを申し入れられた。1986年のことである。

AさんとCさんは同じ中学の同窓生だが当時は面識がない。Aさんが福岡に引揚げたのに対して、Cさんは東京で暮らした。AさんとCさんの出会いがこの地図がより大きなものになる転機であった。Aさんたちが中心部を詳細に描いてきたのに対し、Cさんはより大きな範囲の大連を描くことを想定していた。「たうんまっぷ大連」製作のはじまりともいえるこの転機とはいかなるものであったかを、2人の間で交わされた手紙を頼りに探ってゆく。なお、Cさんは著者が調査を始めたころにはすでに亡くなれており、直接お会いすることはできなかった。ここで登場するのは手紙の内容と、Aさんによる回想である。

Aさんの自宅で遺品の整理をしているとき、CさんからAさんへ宛てた手紙を発見した。3通の書簡が保存されていた。すべて1987年に届けられた手紙である。この年は「たうんまっぷ大連」が発行される1年前である。手紙はどれも「たうんまっぷ大連」を製作するにあたっての決めごとについて書かれている。また、おそらく3通の手紙のほかにもやり取りをしているようで、たとえば一緒に地図を作ることはすでに決まっているし、地図の名前を「たうんまっぷ大連」にしようと協議した形跡がない。そうしたことはすでに決まったこととして、3通の地図を見

てゆく。

最初の手紙は書き出しの部分が一部紛失している。途中からの内容は、「たうんまっぷ大連」の記載範囲、販売価格、著作権の問題などが箇条書きに記されており、「Cさんの意見書」として記されている。手紙は原稿用紙3枚にしたためられている。以下が最初の手紙の抜粋である。下線は筆者が記した。

(1) 1987年(昭和62年) 初頭[時期不明] CさんからAさん宛て手紙抜粋

- ・ 範囲—春日町以北、州庁以東。一枚方式とする。連鎖街、浪速町一帯の繁華街、山形通そのほか必要に応じて拡大図を一枚の中に入れる。
- ・ 範囲を右記にしたのは、春日町以北とすると自動的に紙の横長比で州庁(旧関東州庁)迄入る。我々二中卒の者には好都合。

ここでは地図の範囲について意見が述べられているが、AさんとCさんの母校である大連二中の校区までを範囲とする提案である。母校を記載する製作者の想いが込められている。そして完成した地図では、やはりこの提案通りの範囲となっている。この範囲は、つまり日本人が生活していた範囲で、中国人たちの生活範囲は記されていない。中心部に近い中国人居留地区は、イラストや詳細図によって隠れてしまっている。

- ・ 大きさは46版原紙。788×1091に入る範囲とする。以上すべて「たうんまっぷ新京」の方式を踏襲する。
- ・ 貴君の原調査票を拡大していつて何とか「新京」(「たうんまっぷ新京」)に見劣りしないものを作りたいものです。

ここで、「たうんまっぷ大連」には「たうんまっぷ新京」という参考資料があったことが記される。大連よりも前に新京を舞台に記憶地図が描かれていた。新京は、現在の吉林省都・長春である。長春も満鉄沿線の都市で、日本が建設した植民地都市である。満洲国が建国されるにともない、満洲国の首都として機能した。大連の都市計画を参考に、いくつもの円形広場を広い街路で結ぶ構造が採用されている。現在でも円形広場を中心にして放射線状に街路が伸びる構造は変わっていない。

この「たうんまっぷ新京」が、Aさんの遺品の中に残されていた。製作者は新京一中の卒業生であるが、「たうんまっぷ新京」をひとめ見ると「たうんまっぷ大連」に非常によく似ていることに驚く。「たうんまっぷ」という題字もひらがなであり、地図のサイズも同じ、手書きの地図で、商店の名前などがびっしりと書き込まれ、イラストも盛り込まれているような手法は、Cさんが「たうんまっぷ新京」の方式を踏襲すると明言しているとおおり、まったく同じである。製作者の息遣いや圧倒的な情熱、「故郷」である新京に対する強い想いが伝わってくる感覚までも共通している。サイズだけでなく、あらゆることを「たうんまっぷ新京」に依拠しているといえる。

「たうんまっぷ新京」については詳細が不明であるため、だれが、いつ、どのような経緯でこの地図を製作し、その目的は何か、またAさんやCさんはどのようにして入手したのか知ることはできない。しかしAさんやCさん以外にも同じような考えをもつ人々が確かに存在し、都市は違えども、旧満洲における「都市住民の日本人」ととしての植民地体験は、共感できる出来事として記憶されていることがうかがえる。

植民地体験をもつ日本人であっても、都市と農村では生活環境がまるで異なる。上下水道やセントラル・ヒーティング、舗装道路や各種インフラが完備された植民地都市部の生活は、日本列島の生活水準よりはるかに高く、中国東北部の農村地帯に開拓農民として移住した日本人とは全く異なる生活環境である。生活環境が異なれば当然記憶も違ってくるだろう。「たうんまっぷ大連」は、「日本人」や「引揚者」という集合よりさらに限定された「都市住民の日本人」の記憶が対象となっていることがわかる。

(2) 1987年(昭和62年) 3月9日付け手紙抜粋

3月9日付けの手紙でも、ひきつづき「たうんまっぷ大連」の書式がテーマである。この手紙が書かれる前に、AさんがCさんに「たうんまっぷ大連」の原案を送っているようで、それに対してのCさんの意見が記された手紙である。原案に対してCさんは概ね納得している様子だが、いくつかの部分について以下のようにつづっている。

作図にあたっては「たうんまっぷ大連」では店並びを強調したいので、「たうんまっぷ新京」を参考にされて左記の建築物等の輪郭は消し去った方がよいと思います。

- 一、埠頭の倉庫群
- 一、学校や官庁などの建物
- 一、道路の幅等もいくらか小さめにする
- 一、電停の表示なども小さくする

できあがった「たうんまっぷ大連」は、このCさんの意見を反映している。埠頭の倉庫群は削除されており、学校等の敷地には名前のみ記載され、道路は小さくされている。削除された箇所にはかわりに、埠頭倉庫群には埠頭や船のイラストが、学校敷地には校章のイラストが記載され、路面電車の路線もほとんど記されていない。ここでもイラストを配置することで見えなくなっている部分がある。埠頭倉庫群は中国人の低賃金労働者が多く働いていた場所であり、つまり日本人にはあまりなじみがなかった場所だ。日本人にとっては埠頭の待合所に愛着があり、待合所のイラストが添付されている。埠頭待合所は大連港の象徴的場所であり、引揚げのとき出立した思い出の場所である。

地図の補足以外に、今回の手紙では「電話帳」の発見についての内容が主要テーマとなっている。

光丘会の幹事会で皆さんにお披露目したのでさっそく13回生の三溝さんから（お父さんは日満商事の社長）、昭和13年度の大連の電話帳を頂きました。丁度調査時点もそのころが適切と考えていましたので、今電話帳より資料を作り、各街路の家並みを調べて居ります。貴君の作られた店名で電話帳にないものも多く、一気に下調査は核心に持ち込めそうです。

（中略）電話帳には明らかに誤植と思われるものもあり、また同一番地でも表通りか、横丁か、2階かなど、迷うものもあり、水商売では始終代変りして店名の変っているものもあるようで迷わされます。貴君の作製地図の店名でこのリストにないものは、電話帳に載っていないからです。但し、風呂屋には当時電話帳が必要なかったのか、一軒を除いて載って居りません。

昭和13年度の電話帳にはAさんも喜んでいました。インタビューによるAさん談話である。

「僕らが喜んだのはね、昭和13年度の電話帳を手に入れたこと。この電話帳を手に入れたこともあり、時期を設定しようということになって、“大連が一番安定して栄えていた”昭和12年から15年くらいに絞ったんです。」

この電話帳とは大連中央電話局発行『大連電話番号簿 昭和13年4月1日現在』である。Aさんがコピーを自ら製本して大切に保管されていた。50音順に並ぶ情報は370ページにわたり掲載され、加入者名、電話番号、電話設置場所、職種が記されている。例えば同窓会で多くの人が記憶していた「喫茶エミ」は、「エミ 江見光男 本局2-5272 浪速町130、支店伏見3-4530 羽衣町大連市場、喫茶店」とある。

最初のページ上部には「日本人、欧米人ノ部」と記されている。この電話帳は（広告も含め）すべて日本語で書かれており、日本人を利用者と想定していることがわかる（英語表記は一切ない）。この電話帳が「日本人、欧米人ノ部」であるとするならば、たとえば「中国人、朝鮮人、蒙古人、満洲人ノ部」といった日本人・欧米人以外の人々を対象とした電話帳も存在しただろう。しかし遺品の中にはそれらの電話帳はなかった。そもそもAさんやCさんが日本人以外の電話帳に関心を持っていたか疑問であるが、両者にとって「日本人、欧米人ノ部」は重要なものであった。

電話帳の発見は、「たうんまっぷ大連」作成に大きな影響をあたえた。同窓会から寄せられた記憶と電話帳を照合することで、より多くの情報を地図に書き込んでいく。一方でCさんが「電話帳には明らかに誤植と思われるものもあり」というように、絶対的に正しい存在として電話帳をとらえているわけではないが、それはあくまで日本人地区の情報の不正確性であって、日本人・欧米人以外の人々についての情報が載っていないという、根本的な点にか

んしては触れられていない。

出来事の正確性を示す証拠としての電話帳の導入によって、さらに強固な集団の記憶へと制度化されてゆき、「よりたしかな」大連の風景が構築されていった。しかし一方で、「電話帳そのもの」への懐疑がないために、入手した電話帳に記載されていなかった事項については地図に反映されるはずもなく、結果として日本人に限定された記憶が選択されることとなり、日本人以外の記憶は忘却されてゆくことになる。

(3) 1987年(昭和62年) 4月26日付け CさんからAさん宛て手紙抜粋

3枚目の手紙は、九州で開催される同窓会にCさんが東京から参加することが中心的な話題である。両者はこの時期までにどれだけ会っているかわからないが、軽快な文章から親密な関係がうかがえる。「たうんまっぷ大連」にかんしては、Cさんが同窓会との連携を積極的に進めているということがしるされているにとどまる。

「たうんまっぷ大連」作製のことは光丘会幹事会で発表しましたし、又、大連会会報にも貴君と二人で作製中の旨掲載してもらいましたので、もう後には引けません。

以上のように、Aさん兄弟の個人的な作業から始まった記憶地図作りは、「同窓会」を経由しながら、次第に参考にする記憶が限定されてゆく過程であった。「同窓会」での聞き取り、Cさんの参加、「たうんまっぷ新京」、そして「電話帳」の導入により、地図に描かれる範囲は限定され、参考にされる集団の記憶も限定されてゆくことで、より強固な集団の記憶を形成していった。ここに描かれた集団は、「日本人」や「引揚者」という限定された集団よりもさらに限定された「都市住民の日本人」という集団であった。日本人以外の人口のほうが多い植民地都市大連にあって、集団を限定した「たうんまっぷ大連」は、植民地都市の集合的記憶ではなく、一部の日本人に限定された集合的記憶であるといえる。

翌1988年10月、初版「たうんまっぷ大連」が完成した。

5 Bさんと大連

(1) 「たうんまっぷ大連 現況図」

しかし地図が発行されるや、それまで地名・店名・施設名まで網羅した地図がなかったこともあり、多くの友人や同窓会などからの注文が殺到し、すぐに在庫はなくなってしまうほどの盛況ぶりであったという。翌1989年には初版を見た人からの情報や意見も届くようになり、訂正・追記して同じ3点セットで第2版を、さらに1991年には改訂第3版を発行する。

第2版、第3版と版が重ねられてゆくが、改訂の度にいくつかの情報が書き加えられている。全体のスケールは変わらないが、街路の位置が変更されていたり、商店の名称が変えられていたり、場所によってはひとつの街区が詳細に書き加えられていたり様々であるが、それらは寄せられた記憶によって変更されていった。これだけ反響をよぶ盛況ぶりは、やはり集団や範囲が限定されたことが影響しているだろう。多くの人々を対象にするのではなく、一部の人々に限定して作成されたことが、関係する人々にとってはかけがえのないものであったのだろう。改訂にともなう記述の変化を追う作業は、さらなる資料分析を踏まえて別の機会に言及する。

さて、1991年の第3版を発行したところから地図作りは新たな局面を迎えることになる。大連の都市再開発の始まりである。急激な再開発に伴い、「たうんまっぷ大連」だけではその利用価値が半減してしまうようになってきたため、「昔の建物や町並みが現在どうなっているのか」がわかるような新しい地図を求める声が地図購入者から上がってきたのだ。

先にも述べたが、1990年代初頭の大連は、鄧小平による改革開放が加速した時期であり、「沿海開放都市」に指定されている大連は、急速な経済成長をとげる。

こうして「昔の大連が今どうなっているか」を知ることでできる「たうんまっぷ大連 現況図」が作られることとなる。そこで現地調査を依頼されたのが、中国人Bさんであった。1994年のことである。BさんがCさんから現地調査を依頼されたのは、AさんCさんと同様に、Bさんも大連二中の卒業生でありCさんと親交があったからだ。

Bさんの調査は、ひたすら歩いて現況を調べるというものであった。調査についてBさんは次のようにかたてくれた。

「とにかく調査ですから街の東から西にかけて残されている建物を一気に調べ始めました。東の端の大連港からスタートしてね。ところがその時代というのはどんどん街が変わっているときで、今日はこの店だったのが、明日は違う店になってしまうように、変化がとても早いんですよ。だから調整が追いつかずに苦勞しました。でも私には結構なトレーニングになりましたけどね（笑）」

Bさんの行った調査は、毎日ノートをもって街を歩き、「過去の建物が今どうなっているか」をしらみつぶしに調べ続けるという地道な作業であった。

また、BさんはAさんとも協力して作業を行っている。Aさんは1年に数回大連を訪れていたが、その度にBさんの日々の街歩き調査に同行していた。こうした2人の作業は、大連で発行されている日本人向けフリーペーパー『Dalian walker』に取り上げられた。2人で並んで写った写真が掲載され、「たうんまっぶ大連」の作成についてAさんの語りが記載されている。

Bさんたちは「むかしあった建物を中心に現在どうなっているか」を調査した。変化が著しい大連では、かつての小さな店舗が路地裏にも無数に存在していたが、今では店舗がないばかりか路地さえもなくなり、区画には巨大なビルがそびえたつ。かつての建物についての記述は、大通りに面したランドマークとなるような建物や学校が主である。しかし、都市再開発のさなかであるから新しく建設途中の「地上328mの68階建て高層ビル」や、「勝利広場地下4層の地下街」など、あたらしい建物の情報を多数盛り込んでいる。Bさんの視点は、「かつての大連を今の大連にあてはめるといよりは、現在の大連は昔とくらべてどうあたらしくなったか」ということに重点がおかれているといえる。

2年あまりの調査をへて、1997年の第4版「たうんまっぶ大連」から「たうんまっぶ大連 現況図」が添えられて発行された。「たうんまっぶ大連 現況図」は、「たうんまっぶ大連」と同縮尺で記され、新旧大連を対比してみることができるようになっている。第4版の出版後、「たうんまっぶ大連」も「たうんまっぶ大連 現況図」も、これまでと同様に地図購入者から意見が寄せられ、2年後の1999年に、第5版としてそれぞれの改訂版が発行されることになった。しかし、このときすでに再開発のスピードに調査が追いつかなくなって、地図に書ききれないほどの変化が起こっており、また制作者の高齢化も一因となり、この第5版をもって終刊となった。また1999年にCさんが亡くなられたことも終刊の要因となった。

Bさん主導による「たうんまっぶ大連 現況図」を眺めていると、「たうんまっぶ大連」には載っていない場所があることにきづく。中国人街である。「たうんまっぶ大連」では多くのイラストや詳細図が添付されていたが、その陰にかくれていた中国人街が現況図では記述されていた。植民地時代大連では、日本人街の町名は「-通り」や「-町」と呼ばれていたが、中国人街は「-街」と呼ばれていた。これは今でも使用されている呼称で、「浪速町」が「天津街」となったことが例である。日本人による記述には隠れていた場所が、Bさんの地図では記載されていた。

しかし、そこにはとりわけ古い建物が残されているわけでもなく、Bさんも建物名などを記していない。ここはBさんの戦前の自宅のあった場所である。Bさんの自宅は、この中国人街のとおりを挟んだ向かい側の日本人街にあった。当時を振り返ってBさんは語る。

「ソウルの街はずれで育ったからか、大連のすべて、特に中国人の風物、生活様式などが物珍しかった。我が家は日本人住宅地にあったが、大通りを隔てた向こう側は中国人街となっていた。中国人の新婦を迎える婚礼の行列や出棺の長蛇の列が我が家の前を通る。よく2階からながめていた。好奇心の強い私は、ひとりでもよく中国人街へ見物に行った。そこで見るもの聞くもの、すべてが珍しく異様で心が引かれる思いだった。」

「旧暦の年の暮れになると、年越しの品を買う人で中国人街はいっそう賑わう。（中略）朝鮮人の家庭も旧正月

に重きを置くため、中国人と同じように楽しく過ごす。しかし我が家は新年も同様に祝うのだった。中国の自然風物や中国人の生活風俗といったものを観察し体験して中国文化を少しずつ理解するようになったことは、後の人生に大きく影響するようだった。(中略) 幼いころに中国人の生活習慣や習俗を観察してきたことが中国人としての生活に溶け入ることに役立った。」

(Bさん手記より)

Bさんはある手記にもこう記しているように、かつての自宅を中国人街と合わせて記憶している。現況図に自宅跡を記していないが、日本人による記述には隠れていた場所は、Bさんの地図では記載されていた。またこの記述からは、大通りをはさんでこちら側と向かい側で、住んでいる民族が異なることが示されており、植民地都市の分類化された都市構造をみることができる。

Bさんは旧正月と新年のできごとにも触れる。中国人と朝鮮人が旧正月を祝うのに対し、日本人は新年に重きをおく。Bさんの家庭は旧正月と新年を両方祝うのであった。Bさんが複数の民族集団に属して意識していたことがうかがえる。「敗戦直後は無国籍状態であった」とおっしゃったように、Bさんにとって「国籍」や「民族」という集団は、日本人たちのように自明のものであるわけはなかった。日本人たち以上に強く意識せざるを得ない記憶であった。

(2) Bさんと大連

Bさんが「たうんまっぷ大連 現況図」に精力的に取り組んだ背景には、Bさんと大連との間にある、長く複雑な関係性があるだろう。Bさんのプロフィールでも触れたが、朝鮮人の両親を持つBさんは、日本人として大連で育ち、終戦によって国籍を偽りながらひっそりと暮らし「日本人においてきほりにされた」ように感じたが、やがて中国籍を取得して中国人となる。中国人となってからも、文革期に下放も経験され、改革開放以後は、大学教授として日本語を教えてきた。Bさんの人生は、短期間にめまぐるしく変化してきた大連と重なっているようだ。

Bさんと日本人との深い関係性をしめすものとして、Aさんとの膨大な往復書簡がある。AさんとBさんの間でかわされた往復書簡は、Aさんの遺品のなかにあり、1997年ころから2004年までの期間の手紙が3冊のファイルにきちんと整理されていた。さらにBさんからの手紙だけでなく、Aさん自身が書いた手紙のコピーまでご自身で綴じられていたことで、両者のやり取りを知ることができる。2人は平均して一ヶ月に二度はやりとりしていた。これだけでもAさんとの親交の深さはみてとれるが、文面にはよりはっきりとあらわれている。例えば、Cさんが1999年に亡くなられた際に、BさんからAさんへ宛てられた手紙である。

「C様とは1980年以來のお付き合いでした。大連をこよなく愛し、大連の変容について特に関心を寄せておられました。…この20年のお付き合いで、C様は私にとって、兄貴、先輩、先生とすべてをくるめた存在でいらっしゃいました。数多くの印象深い思い出や感慨が胸を去来します。」[1999年10月2日]

BさんはCさんを「兄貴、先輩、先生」と慕う。Bさんは、Cさんの容態が悪くなり始めてから、何度も東京にいるCさんのもとへ足を運んでいた。この手紙が書かれたのは、Cさんが亡くなられてから一ヶ月後くらい経過したころである。手紙の冒頭では「Cさんが亡くなられてからというもの、あらゆることが手につかなかった」と心境を述べていた。

Aさんとの関係についても、Aさんの大連にたいする情熱に共感するところが多々ある。

「Aさんが仕上げられた南山麓一帯の地図について拝見しました。丹念にお調べになり、一つ一つお調べになったそのご苦心とご苦勞のほどが察せられて頭が下がる思いでした。さすがに、と敬服しています。あらためて自分自身に情熱がみなぎる思いです」[2000年3月25日]

これらの発言からBさんは、大連をこよなく愛するAさんやCさんを慕い、日本人と共通する価値観がみてとれる。

それは「ふるさと」大連を特別な場所として慕う純粋さであり、共通の集団の間であるAさんやCさんを先輩・仲間と慕う純粋さである。つまり、Bさんがこのような発言をすることができるのは、単に植民地都市大連を経験しているからだけではなく、Bさんが「大連二中」「同窓会」という集団のメンバーだからであり、今でもこの集団と関わりを持っているからである。

しかしBさんの語りは日本人と重なるばかりではない。例えば、再開発によって古い街並みが消えてゆく大連の現状に対して、日本人たちは「郷愁」からくる寂しさを口にしますが、Bさんは冷静な反応を示す。2000年11月にAさんへ宛てた手紙である。

「大連の思い出多きものが一つ一つ消えてゆくことに一抹の淋しさを感じないことはありませんが、これも大連の発展のためであり仕方のないことでしょう。大連の発展は両手を挙げて歓迎しますが、それでも、あまりにも人工的に手を加えて大連全体が特色を失うことはおそれます。」[2000年11月25日]

やはり日本人の語りとは温度差がある。Bさんは今の大連の生活者である「中国人」であるから、かつての大連住民である日本人と発言が異なるのは当然である。Bさんにとって大連は「ノスタルジー」や「郷愁」の場所であるだけでなく、現在の生活の場なのである。

けれども、Bさんの語りは中国人ともすべて重なるわけではない。なぜならこれまでも述べてきたように、Bさんはもともと中国人であるわけではなく、あとから中国人になった人であるからだ。終戦直後、「無国籍状態」となったBさんは、当時のことを「なんとも名状しがたいものがこみあげてくる」と語っている。

「学校が閉校となってはじめて日本の敗戦が事実だと納得したが、なんとも名状しがたいものがこみあげてくるのを覚えた。だが同時に、我が家の者も“国籍を奪われた”無国籍の浪人に成り、満洲の荒野に放り出された。ソ連兵の進入を防ぐために玄関のドアに貼った韓国の旗印のみが、韓国人であることを表明している。」[Bさん手記より]

多くの中国人が終戦直後喜びにわき、ソ連軍の進入を歓迎したのに対して、Bさんは逆の反応を示す。この反応は日本人と重なる部分があるが、Bさん一家の“国籍を奪った”のは日本人である。中国人とも違う、日本人とも違うBさん一家の置かれた境遇は、玄関先の「韓国の旗印」にあらわれている。しかしこの旗印も、ソ連軍の暴力から逃れるための手段であり、韓国人としての集団に属しているというわけではない。Bさんの戦後はこうして始まってゆく。

このようにBさんの記憶は、日本人や中国人と重なる部分を持ちつつも、日本人とも違い、中国人とも違い、韓国人とも違う。Bさんは立場の異なる複数の集団と関わりをもってきたことで、いずれかの集団に限定されない領域横断的な視点で大連をとらえている。それは筆者がお聞きしたインタビューにもよくあらわれていた。

「大連には長い間日本人が統治してきたという歴史があります。そして中国人はそれをそのまま受け継いできています。受け継いでくるときに、大連をどういう都市として認識してきたかが大きな問題です。単なる人が住む港町としてだけではなく、ロシア時代、日本時代、そしてまたロシア時代と経て、中国の時代を経ている、そんな誰にとっても異国情緒がある街なんです。大連とは、ロシアの街でもない、日本の街でもない、中国の街でもない、異国情緒のある街であるというのが、特色なんです。」[2005年5月大連において]

「国家」や「民族」という大きな集団に翻弄されてきたBさんは、そうした集団にとらわれてきた植民地都市大連を、皮肉を込めて「異国情緒」と言いあらわした。「異国情緒」という言葉は、「ノスタルジー」「アカシア」「郷愁」と並んで、日本人たちの好む大連キーワードであるし、現在の大連市政府が観光目的のPRに使用する言葉でもある。「だれにとっても異国情緒がある街」と表現する背景には、Bさんが大連ですごした70年のなかでさまざまな集団に属してきた実体験が反映されており、大連が単なる港湾都市ではなく、植民地都市であったことを後世に伝える想

いが込められている。さまざまな主体の利害によって構築されてきた植民地都市としての重層性こそが、大連の「特色」なのである。

しかし大連が経済的に豊かになって都市の様相がめまぐるしく変化し、観光資源として植民地時代の建造物が再利用され、日本人を経済産業の重要なパートナーとして、あるいは主要観光客として迎え入れているように、中国人社会における植民地都市の記憶も変容されている。

Bさんは大連での70年間、「韓国人」「日本人」「大連二中」「同窓会」「中国人」「大学教員」「そのいずれにも属さない」という集団の成員として、集団の間を移動しながらこれまで生活してきた。言い換えれば、支配者の立場も経験し、被支配者の立場も経験し、どちらでもない立場も経験してきたことでもある。つまりBさんの記憶はある限定された集団に依拠するわけではなく、複数の集団にまたがった横断的な構造をもつといえるだろう。「たうんまっぶ大連」の日本人たちの記憶は限定された集団の記憶であったことと対照的に、Bさんの記憶はいずれかの集団に限定されていない。

したがって、刻々と変化する現在の大連においても、Bさんは柔軟な対応をみせる。Bさんが1980年以降個人的に書き記している「大連だより」には、その時期における大連の都市の変化が詳細に記されている。1年に3、4回記されたこの手記は、Aさんの手元にも届けられ、Aさんはすべてファイルに保存されていた。これらの膨大な「大連だより」には、大連がどんどん発展してゆく様子が生き生きと描かれている。「大連だより」には、過去だけでなく将来の大連もみつめるBさんの前向きな姿がある。Bさんは「過去の大連住民」であるだけでなく、「韓国人」「日本人」「中国人」であるだけでもない。「現在の大連住民」という集団にも属しながら過去と未来を見つめている。

IV章 おわりに

本論では、「たうんまっぶ大連」という記憶地図を取り上げ、地図が製作される過程を追いながら集合的記憶の形成プロセスを分析し、植民地都市大連がどのように意味づけられているかを検討した。

思い出の場所を記すというAさん兄弟の個人的な記憶の記述からはじまった大連復元図作成では、「同窓会」や「大連二中」を中心にした集団が形成されていった。同窓会であつめられた記憶を持ち寄ることで、「大連」の輪郭が構築され、集団の記憶としての「たうんまっぶ大連」がうまれてゆく。これはつまり、すべての出来事をしらなくても、自らの体験として記憶してゆく疑似体験であった。したがって、集団の記憶からもれた中国人たちの生活範囲は地図に記されていない。また、都市は違えども、旧満洲における植民地都市生活者にとっての植民地体験は、共有しうる記憶であることも明らかとなった。

「同窓会」「大連二中」の集団は、Cさんの参加、「たうんまっぶ新京」、そして「電話帳」の導入により、「より確かな」強固な集団の記憶を形成してゆく。しかし、それぞれの集団の主体は「都市住民の日本人」であり、植民地都市の性質としての主体の複数性はこの地図にはあらわれてはいない。「たうんまっぶ大連」は、植民地都市の集合的記憶ではなく、一部の日本人に限定された記憶であった。

一方Bさんは、「日本人」「大連二中」「同窓会」「中国人」「韓国人」「そのいずれにも属さない」という集団の成員として、「たうんまっぶ大連 現況図」を記述した。そこでは削除された記憶の場所が回復されているなど、日本人とは異なる視座があらわれていた。

またBさんの語りは非常に示唆に富んでおり、日本人や中国人と重なる部分を持ちつつも、日本人とも違い、中国人とも違い、韓国人とも違う。Bさんは立場の異なる複数の集団と関わりをもってきたことで、いずれかの集団に限定されない領域横断的な視点で大連をとらえている。そして、大連が単なる港湾都市ではなく、植民地都市であったことを後世に伝える想いが込められている。

植民地都市大連を考察する視点で「たうんまっぶ大連」を分析したとき、一部の日本人の記憶に特化したこの地図は、植民地都市そのものの記憶である重層性が忘却されていることを批判せざるを得ない。しかし、「たうんまっぶ大連」と「たうんまっぶ大連 現況図」は2枚あることで、有意義なものとなる。それぞれの地図は、版を重ねるごとに精緻になってゆき、その背景には幾人もの人々の記憶があり、「たうんまっぶ大連 現況図」は、Bさんの

領域横断的な集合にとらわれない視点が盛り込まれることで、植民地都市大連が浮かびあがっている。2枚の地図は、より多面的で立体的な植民地都市大連の集合的記憶を形成している。この多面的で立体的な重層性こそが植民地都市の集合的記憶である。

大連は、「国家」「民族」「中国人」「日本人」「韓国人」「大連二中」など多層的、重層的な構築の場となっており、それぞれの集団ごとに異なる意味付けが行われていた。2枚の地図は、こうしたさまざまな集団の結節点として構築された場である。植民地都市は単純にイメージ化される場所ではない。

テッサ・モーリス・スズキは、過去の出来事と人々のあいだに開かれた、発展的な関係の必要性を「歴史への真摯さ」と表現した。「現在の人々が過去を理解しようとするプロセスに焦点をあて、一過去についての特定の表現がどこまで「真実」か、絶対かつ究極のリアリティにどこまで肉薄しているか—を議論するより、人々が過去の意味を創造するプロセスの「真摯さ」を検討評価するほうが有益である」[2004(2006):34]という。

「たうんまっぷ大連」において、人々が過去の意味を創造するプロセスのなかに、生きがいや、複雑な出自にともなう並々な情熱が込められていた。「たうんまっぷ大連」では、ひとつの出来事にたいして、さまざまな立場の人々による、さまざまな対話が絶えず繰り返されており、私たち自身が大連の歴史と向き合うとき、多くの示唆を与えてくれる場所である。

ここで、本論の位置づけと残された課題について言及したい。本論は博士論文の一部を構成する。博士論文では植民地都市大連をめぐる集合的記憶がいかにかに生成・継承されてきたのかを、日本と大連で繰り返される表象行為から考察してゆくが、分析対象として個人の記憶の語りや文学作品から、大連の都市再開における建物保存活動にいたるまで、幅広く対象としたい。本論は、そのうちの植民地大連を体験した個人々の記憶と、彼らの集合的記憶の関係について考察したものである。

今後の課題として、集合的記憶の概念が一定の集団に依拠する点に留意したとき、中国人Bさんの記憶に影響する重層的な集団群はどのような関係にあるのかが問題となる。そこで、日中にまたがる「同窓会」という集団に焦点を当ててゆきたい。AさんもBさんもそれぞれが記憶を想起するきっかけとなった場所が「同窓会」であった。筆者がこれまでの研究でお世話になってきた「同窓会」の方々に引き続き協力を求めながら、植民地都市大連の集合的記憶形成における「同窓会」の役割について今後中心的に研究を進めてゆく。

最後に、2004年5月24日付の、BさんからAさんにあてた手紙を記す。

「…お手紙にありました佐藤量さんの件、今日会って来ました。大連の都市建設に興味をおぼえられたようでした。大連の都市建設の総体的計画から見れば、現在の都市建設は、質的に向上させるために環境保全と調整を行っていることを指摘し、大連の特色、緑豊かな自然環境と異国情緒豊かな町並みを保全するために市のほうで努力していることを説明したものです。2時間半の談話でしたが、一応満足したようで安心いたしました。」

すでに筆者自身もAさんとBさんの往復書簡に組み込まれており、連綿と続いている大連をめぐる集合的記憶の形成プロセスの一部に組み込まれている。筆者自身と大連の歴史はつながっている。

注

- 1 Halbwachs, M 小関一郎訳『集合的記憶』[1989]1999,行路社,pp.2
- 2 同上書,pp.96
- 3 同上書,pp.167
- 4 同上書,pp.207
- 5 『記憶のかたち』による
- 6 富永孝子『大連 空白の六百日—戦後、そこで何が起こったか』新評論、[1986]2003
- 7 太平洋戦争の終結直後の1945年8月22日、日本に変わってソ連軍が大連に進出した。ソ連軍統治のもと1945年に旅順とあわせて「旅大市」と改名され、同年「旅大市政府」が誕生する。なお、日本が建設した大連神社や西本願寺は終戦直後に解体されたが、そのほかの建

- 物はほとんどがそのまま使用された。例えば旧日本人住宅は、旅大市政府が所有し住宅困窮者に分配することで住宅不足を緩和させた。『大連・解放40年史』[董 1988]によると、発足直後の旅大市政府は1945年11月に、「日本および傀儡政府（満洲国政府）のすべての軍財産、政府財産の接収あるいは没収に関する規定」を公布し、大連地区内の、日本および傀儡政府の土地、家屋400万3580㎡を接収あるいは没収することを決定した。この結果、1946年7月～1947年5月までに計3回住宅調整を行い、合計2万3900世帯の貧民層のために旧日本人・ロシア人住宅を分配し、これによって全市30%の人口が洋風住宅に入居した。この結果、古い住宅はそのまま保存され、旧住宅の多くは今でも当時と同じように使用されている。
- 8 「沿海開放都市」には全国で14都市が選出される。以下が14都市。大連、秦皇島、天津、煙台、青島、連雲港、南通、上海、寧波、温州、福州、広州、湛江、北海。「沿海開放都市」には「経済技術開発区」という別個の都市とも見える巨大なゾーンが既存の都市に隣接して作られた。ここには世界中の企業が集まり、会社や事務所だけでなく、マンションやショッピングモール、学校、公園が設置された人工都市である。上海にはこの開発区が3つあるが、それ以外の都市には1つずつ設置されている。東北地区唯一の沿海開放都市である大連の開発区は、中心部からおよそ27キロ離れた沿海部に設置された。2002年から大連市内に通じる軽便高速電車が開通し、大連中心部までおよそ20分で到着する。2003年現在、この開発区には1500社の外資系企業が誘致されており、420社が日系企業である。
- 9 「南巡講話」とは、1992年に鄧小平が中国南部を視察してまわり、改革開放を促進させるために行った講話のことをさす。「富めるものから富め」という「先富論」などの講話をしてまわる。また同年10月の中国共産党第14回党大会において「社会主義市場経済」路線が確定した。これにより、「中国の特長を持った市場経済」の建設に邁進することになり、1992年は改革開放が急速に進行した年といえる。
- 10 中国のIT会社（華信DHC、海輝Hisoft、東軟Neusoftなど）の開発拠点があるだけでなく、世界のソフトウェア開発・情報サービス（コールセンターを含む）関係の企業、NEC、松下、Sony、トライアル、Dell、HP、IBM、SAP AG、GENPACT（GEのIT子会社）などが進出している。[JETRO大連事務所資料による]
- 11 大正・昭和期の満州で活動していた製鉄所。1918年、昭和製鋼所の前身である鞍山製鉄所は南満州鉄道の出資で設置された。1933年に社名を昭和製鋼所に変更。1945年、太平洋戦争終結とともに解体。Aさんはここの技術養成所に所属していた。

参考文献

董志正編

1988 『大連・開放40年史』 新評社

南満洲鉄道株式会社編

1917 『南満洲鉄道案内』 南満洲鉄道株式会社

大連市史事務室

2000 『大連年鑑2000』 浦東電子出版

1988 『普及版 大連市史』 昭和10年度版 地久堂発行,原書房発売

大連市対外貿易経済合作局

2003 『大連投資ガイド』 大連市対外貿易経済合作局

水内俊雄

1985 「植民地都市大連の都市形成」『人文地理』37(5), pp. 50-67

柳沢遊

1999 『日本人の植民地経験 大連日本人商工業者の歴史』 青木書店

大西国太郎、朱白

2001 『中国の歴史都市これからの景観保存と町並みの再生へ』 pp. 11-25, 鹿島出版会

阿部康久

2002 「大連における植民地時代の建造物と観光開発」『名古屋大学文学部研究論集（史学）』 pp. 85-102

富永孝子

2003 『大連・空白の六百日 戦後、そこでは何が起こったか』 新評社

オジェ、マルク、森山工訳

2002 『同時代世界の人類学』、藤原書店

関根康正編

2004 『〈都市的なもの〉の現在—文化人類学的考察』 東京大学出版会

モーリス・スズキ、テッサ

2004[2006] 『過去は死なない メディア・記憶・歴史』 岩波書店

宮島博史・李成市・林志弦・尹海東

- 2004 『植民地近代の視座』 岩波書店
米山リサ著 小沢弘明／小澤祥子／小田島勝浩訳
- 2005 『広島 記憶のポリティクス』 岩波書店
今福龍太
- 2003 『クレオール主義』 ちくま学芸文庫
栗本英世・井野瀬久美恵
- 1999 『植民地経験 人類学と歴史学からのアプローチ』 人文書院
山本有造
- 2007 『満洲 記憶と歴史』 京都大学学術出版会
アルバックス、M著 小関藤一郎訳
- [1989] 1999 『集合的記憶』、行路社
阿部安成、小関隆、見市雅俊、光永雅明、森村敏己編
- 1999 『記憶のかたち—コメモレイションの文化史』 柏書房
栗津賢太
- 2006 『集合的記憶のポリティクス：沖縄におけるアジア太平洋戦争後の戦没者記念施設を中心に』『国立歴史民俗博物館研究報告』、
126:pp87-118
ゴブ、ジャック・ル 立川孝一訳
- 1999 『歴史と記憶』、法政大学出版局
太田好信
- 1998 『トランスポジションの思想——文化人類学の再想像』世界思想社
ノラ、ビエール
- 2003 『記憶の場1-3』、岩波書店
富山一郎編
- 2006 『記憶が語りはじめる』、歴史の描き方 3、東京大学出版会

Collective Memory of a Colonial City: The Formation of *Town Map Dalian*

SATO Ryo

Abstract:

This paper analyzes the formation of collective memory by focusing on *Town Map Dalian*, a map of memory that Japanese A and Chinese B, who were residents in colonial Dalian, made in collaboration and published from 1988 to 1999 in Japan.

Town Map Dalian offers a material framework for collective memory. It reconstructs the memory of various groups connected to colonial Dalian. Therefore, considering the formation process of *Town Map Dalian* will give clues to how colonial Dalian is presently conceptualized in collective memory.

The memory of Japanese A in *Town Map Dalian* is provided to show the symbolical collective memory of Japan. It is represented as "Birthplace Dalian". Japanese A's memory is exclusively a "Japanese" memory. This symbolical collective memory forgets the memories of groups other than the Japanese.

On the other hand, the memory of Chinese B in *Town Map Dalian* reflected the groups "Japanese," "Alumni association," "Chinese," "South Korean," and "do not belong to either."

Dalian was constructed by groups such as "Nation," "Race," "Chinese," "Japanese," "South Korean," and "Alumni association," and, thus, it was defined differently by each group. This diversity within the collective memory of colonial Dalian should be recognized.

Keywords: colonial city, Dalian in China, collective memory, *Town Map Dalian*, diversity